日本画

美術科　日本画コース

TW テキスト作品科目　TX テキスト特別科目　S スクーリング科目　必 必修科目　選必 選択必修科目

※下記でご紹介する科目は2024年度開講予定のものです。一部、変更になる場合があります。

日本画コース専門教育科目

STEP①

対象を見る力、描く力を育むとともに、画材の基礎的な扱い方を学ぶ。

科目名	サブタイトル	S/T	必/選	単位数	単位修得試験	履修内容
1年次						
日本画演習 I-1	鉛筆による細密描写／色鉛筆による細密描写（1）	TW	必	各2		野菜や果物をモチーフとして、対象を丹念に描写し、そのものの本質をしっかり捉えて表現することで日本画を学ぶための基礎を身につける。写生を中心に身近な対象物の形、色、質感を捉えることに主眼を置き、ものの見方を深める。画材としてはまず鉛筆、色鉛筆から始め、水干絵具、岩絵具の扱い方までを習得する。
日本画演習 I-2	色鉛筆による細密描写(2)／色鉛筆と水干・岩絵具による制作	TW	必			
日本画 I-1	鉛筆写生	S	必	各1		器物、野菜、果物などのモチーフを組み合わせ、鉛筆および色鉛筆によって細密に描写することにより、形や明度、質感などを理解し、制作の基礎となる描写力と表現力を養う。また、日本画の用具や顔料の使い方を実習を通して学び、制作の基本の手順を理解する。
日本画 I-2	色鉛筆写生	S	必			
日本画 I-3	制作の基本	S	必			
日本画 II-1	水干・岩絵具併用による制作	S	必	2		写生をもとに日本画材を用いて制作する中から日本画の基本的な表現技法を学ぶ。
日本画 II-3	模写制作	S	必	1		古画の模写を通して線描表現と天然の岩絵具について学び、古来の人々の感性を感じ取る。

STEP②

写生から制作への過程を学びつつ、自分なりの表現を考える。

科目名	サブタイトル	S/T	必/選	単位数	単位修得試験	履修内容
2年次						
日本画演習 II-1	静物制作のための写生／水干・岩絵具による静物制作	TW	必	各2		静物をテーマに写生し、それを基に水干絵具・岩絵具で制作する。1年次で培った描写力をさらに深めながらも、単なる写生にとどまらず、写生を通して自身の想いをどのように表現するのか学ぶ。また、樹木と花や実の付いた植物を大きな紙に体当たりで写生することで、生命あるものの本質に迫る。
日本画演習 II-2	樹木の写生／花か実のある植物写生	TW	必			
日本画 III-1	植物写生	S	必	1		植物写生からイメージをふくらませて描くことを学ぶ。さらに、箔を使った技法を試みる。
日本画 III-2	植物制作	S	必	2		
日本画 IV-1	剥製写生	S	必	1		剥製の綿密な写生をもとに作品のイメージを構想し、マチエールなど発展的な技法も使いながら絵画表現について考える。
日本画 IV-2	剥製制作	S	必	2		

STEP③

より専門性の高いモチーフに挑み、制作のスキルを磨く。

科目名	サブタイトル	S/T	必/選	単位数	単位修得試験	履修内容
3年次						
日本画演習Ⅲ-1	自画像素描および写生／上半身自画像制作	TW	必	各2		自画像や、身のまわりの風景の写生から制作までを経験することにより、人物画と風景画の基礎を身につける。
日本画演習Ⅲ-2	風景制作のための写生／風景制作	TW	必			
日本画 Ⅴ-1	人物写生	S	選必※	各2		[人物]実際のモデルを使って写生から制作へとつなげていく。単なる写生ではなく、心の中に表現したいことを育てながら、自分なりの表現を意識して描く。 [風景]さまざまな景色の中から心に感じた場所を画面いっぱいに描き込む。自然の中の季節や時間、建物、行き交う人々の様子などとの対話を通して、自己の絵画表現を考える。 ※「日本画Ⅴ-1・2・3(人物)」または「日本画Ⅴ-4・5・6(風景)」を選択する。
日本画 Ⅴ-2	人物制作１	S				
日本画 Ⅴ-3	人物制作2	S				
日本画 Ⅴ-4	風景写生	S				
日本画 Ⅴ-5	風景制作１	S				
日本画 Ⅴ-6	風景制作2	S				

STEP④

自分の制作テーマを深め、100号作品として完成させる。

科目名	サブタイトル	S/T	必/選	単位数	単位修得試験	履修内容
4年次						
日本画演習 Ⅳ	40号自由制作とレポート／ 卒業制作のレポート、ポートフォリオ	TX	必	4		40号自由制作のための小下絵とレポートを作り、計画的に制作を進める。卒業制作の終盤にはレポートとポートフォリオを作成して自己の作品を検証する。
卒業制作		S	必	6		各自が設定したテーマに基づき、学びの集大成となる作品を制作する。対象物に対する思いや自己の表現テーマをより深め、制作者の思いが伝わる作品を目指す。